ファクトシート

日本政府補正予算 2024（JSB 2024）プロジェクト-レバノン

From the People of Japan

レバノンー危機の影響を受けた人びと、国内避難民、シリア難民、受け入れコミュニティの妊産婦およびリプロダクティブ・ヘルスに関連する病気と死亡を予防するための取り組み

2025年3月～2026年3月

緊急時SRH（SRHiE）クリニックで医療従事者に相談する利用者

背景

レバノンでは、2024年の紛争によって広範囲の地域が破壊され、推定150万人が国内避難民（IDP)となる極めて深刻な人道危機が起きました。レバノン東部にあるベカー渓谷は、最も被害が甚大で、度重なる空爆によって多くの人びとが移動を余儀なくされました。保健医療施設は破壊され、損害を受け、安全上の理由で利用不可能となりました。その結果、行き場を失った人びとは過密状態のシェルターにつめかけるか、ヘルスケアのアクセスが限られた無許可の場所で暮らしています。最も深刻な影響を受けたのは、ベカー渓谷に住む国内避難民のレバノン人家族、シリア難民やパレスチナ難民です。性と生殖に関する健康（SRH）と性・ジェンダーに基づく暴力(SGBV)に関連するサービスに関して危機的な不足が生じ、女性や女児は安全でない出産や意図しない妊娠、GBVのリスクが高まっています。

プロジェクト概要

本プロジェクトでは、IPPFレバノン（SALAMA）が、ベカー渓谷の危機の影響を受けた人びとへの緊急時のSRH（SRHiE）ニーズに対応するために実施し、女性や女児、その他の脆弱な人びとに対して不均衡な影響を与える武力紛争、大規模な移動や保健医療サービスの中断などの複合的な問題に対応してきました。本プロジェクトの対象は、ベカー渓谷に居住する国内避難民、シリア難民、パレスチナ難民や脆弱な受け入れコミュニティです。

IPPFレバノン（SALAMA）は、ベカー渓谷の状況を考慮して選んだ位置にある２カ所の設備の整った常設診療所を通じ、誰もがひとしくサービスを受けられるという、権利に基づく利用者中心の統合型SRHサービスを提供しました。本プロジェクトには、妊産婦・新生児ケア、家族計画、性感染症(STI)予防・治療、性暴力の臨床管理、心理社会的支援、リファラル制度を含むSGBV事例管理を網羅した包括的なSRHiEモデルを導入しました。また、質の高い、持続的サービスを確実にするため、医療従事者の能力向上やコミュニティへの働きかけをプログラムの中核としました。

本プロジェクトは、SRH緊急対応サービスパッケージ（MISP）やIPPFの「利用者中心の臨床ガイドライン」(Client-Centered Clinical Guidelines）を始めとする、国際基準のSRHiEに準拠しています。また、「人間の安全保障」アプローチを採用し、人びとの命を救い、SRHR関連のリスクを軽減し、女性や女児の尊厳・安全・権利を擁護するとともに、コミュニティのレジリエンス（回復力）を高めることを目指しました。

目的

１）SRHR・GBVサービス拡大を通じて、ベカー渓谷の危機の影響下にある住民、国内避難民、シリア難民、受け入れコミュニティの妊産婦・リプロダクティブ・ヘルスに関連する罹患率と死亡率を低減する

２）ベカー渓谷の危機の影響下にある住民、国内避難民、シリア難民、受け入れコミュニティの人びとをエンパワーし、自身のSRHRについて十分な情報に基づいた意思決定が可能となる

３）レバノンにおける人間の安全保障の実現に寄与し、質の高い、権利を基本とした利用者中心のサービスを提供できるよう、サービス提供者やピア・エデュケーターの能力を強化する

主な成果

28,562

28,562人がSRHサービスを受けました

85,684

85,684件のSRHサービスを提供しました

200

200セットの「ママと赤ちゃん用品キット」を配布しました

5,836

5,836人の女性が産前・産後ケアを受けました

134

134件の安全な出産を支援しました

5,960

5,960人がSRH、GBV、HIVに関する情報を受けました

30

30人のボランティアが応急措置、セルフケア、SRHおよび子どもの保護について研修を受けました

3,000

3,000セットの「尊厳を守る衛生キット（ディグニティキット）」を配布しました

235

235人の妊婦が臨床検査を受けました

> 「IPPFレバノン（SALAMA）のクリニックに来る前は、妊娠について心配ばかりしていました。民間の診療所は費用が高すぎて利用できません。IPPFレバノンの提供する無料相談やフォローアップのおかげで、安心でき尊厳も取り戻せました。ようやく、話を聞いてくれる人が現れたのです」
>
> IPPFレバノンクリニック利用者

Nadima*, 16, survivor of sexual violence

主な活動

- ベカー渓谷で、2カ所の常設SRHiEクリニックを運営し、権利に基づく利用者中心の包括的サービスを提供。サービスには、産前・産後・出産ケア、家族計画、婦人科・小児科相談、STIやHIVの予防・検査、GBV事例管理、精神保健・心理社会的支援（MHPSS）が含まれます。
- 臨床SRHサービス提供だけでなく、「ママと赤ちゃん用品キット」「尊厳を守る衛生キット（ディグニティ・キット）」を紛争の影響を受けた女性や女児へ配布し、SRHケアへの理解や継続性が向上しました。
- コミュニティのクリニックやアウトリーチ活動を通じ、5,960人にSRH、家族計画、HIV、GBVの啓発イベントやセッションを実施。若者ボランティアも参加し、信頼関係の強化ならびに繊細なテーマについて安心して話せる場づくりに寄与しました。
- 移動や安全面で制約のある利用者にも継続したケアを提供できるよう、家族計画やHIV、心理社会的サポートに関する電話相談サービスを実施しました。
- 医療従事者やピア・エデュケーターを対象に、緊急時のSRHR（SRHiE）、母子保健や安全な出産、GBV対応、子どもの保護や紹介制度、セルフケア、SRHR応急処置などについての体系的な研修を提供しました。
- 病院や検査機関と緊密に連携し、適切なリファラルと質の高いケアを確実にしたほか、地元自治体や人道支援団体とも連携し、危機的状況にある人びとへのサービスの継続性の確保と責任ある対応を堅持しました。
- 産後のメンタルヘルスなどの対象を絞った情報も含め、印刷物やデジタル形式の情報教材を作成・配布しました。

日本政府提供の「ママと赤ちゃん用品キット」を配布する医療従事者

ベカー渓谷のクリニックで超音波検査を受ける利用者